№3015

インド・ナガランド州における第二次世界大戦の記憶
―継承と観光開発をめぐる近年の動向―

一橋大学/デリー大学　博士後期課程
渡部　春奈

本研究の目的は、インド北東部ナガランド州を中心とした第二次世界大戦のオーラルヒストリーの収集に加え、近年急速に発展している観光開発における歴史表象を検討し、現代社会における戦争と記憶の意味を、社会学的視座から分析することである。

1944 年 3 月から 7 月にかけて旧日本軍が決行したインパール作戦は、インド北東部のナガランド州およびマニプル州の戦争経験者の間では“Japan War”とも呼ばれ、戦争当時、食料提供や諜報活動をした経験が語り継がれている。本研究では現地フィールド調査での聞き取りに加え、観光の現場における歴史表象の実態を検証した。

2019 年はインパール作戦終結から 75 周年を記念する年として、在インド日本・英国大使が公式招待され、数々の慰霊行事が両州にておこなわれた。しかし各慰霊行事の現地住民の参加数は、ごく少数のエリートや行事関係者を除き限定的であり、行事の存在自体が十分に認知されていない現状が、ナガランド州における聞き取り調査を通してあきらかとなった。一方、戦争経験世代からは当時の鮮明な記憶が聞かれ、慰霊行事の認知率の低さとは対照的に、場所やモノを介して過去を想起していることがあきらかとなった。一方、戦争観光に訪れる観光客は、戦争をノスタルジア的に回顧する傾向がみられ、ツアーを提供するガイドもまた、観光客のそうしたまなざしを再生産する主体として機能していた。州政府の戦争観光への関心の高まりは、慰霊目的で訪れる旧兵士遺族が絶えないことが影響を与えているとみられるものの、アクセスやインフラ、安全性の問題など、観光促進には多くの課題がある。戦争の記憶を保存する目的で、ソーシャルメディアを通じて短編集を発信する団体や、ジャーナリスト、教会関係者によるオーラルヒストリー収集活動もここ数年の間に始まっており、戦争の経験が世代を越え、多様な形で記録・保存され、観光の現場においては消費されている。